

奨励賞

自転車少年の夢

西軽海町 山 勝三

生来不器用な上、運動神経が人一倍鈍く、小学校時代の図工と体育の通知簿は、いつも五段階評価の3（普通）だった。最もこれは実質2以下だったのだろうが、他の教科が比較的よかったので、先生が全体のバランスを考え、お情けでつけてくれたのだろう。

そんな訳で自転車に乗れるようになったのも、わんぱく仲間内で一番遅かった。自転車といっても戦後間もない当時は、今のような子供用は珍しく、みな大きくて重い大人用の自転車で練習した。当然ながら、

ちびっ子がサドルに跨ると足がペダルに届かないので、「三角乗り」と称する、車体の三角形のフレームの間に片足を差し入れ、バランスを取るため自転車を外側に傾け、お尻を浮かせながら乗った。この一連の動作が運動神経の鈍い私には殊の他むづかし、転倒を繰り返している内に嫌気が差し、乗れないままに、練習をあきらめてしまった。

私が自転車に乗れるようになったのは、何と小学校五年生の時。ようやくサドルを限界まで下げると、ぎりぎり足がペダルにつくようになってからである。

何と速くて便利な乗り物だろう。このとき以来、自転車は私の愛すべき最良の友となった。嬉しくて朝から晩まで家の近くを乗り回った。学校が休みの日など朝から遠方に出掛け、日が暮れても帰らなかつたこともしばしばで、母親に心配のかけ通しだった。そしてこの頃から、子供心に、日本を、世界を、自転車で駆けまわる夢を持つようになった。

しかし、学校を卒業して就職し、結婚して家庭を持ち、子育て、教育と続くうち自転車とはまったく疎遠になり、とうとう定年まで五十年余の間、夢を果たす機会はな

かつた。

待望の定年を迎え、再就職の誘いを断つて、六十歳の誕生日（還暦）を迎えた初冬の日の朝、私は半世紀越しの長年の夢を果たすべく、自転車に跨がり、遙か沖繩を指して自宅を出発した。自転車による日本一周の旅のスタートである。

そして、この旅は日本の最南端、沖縄の波照間島でUターン。日本の最北端、北海道の宗谷岬で再度Uターンして、翌年の晩秋、自宅に帰り着くまで、全国四十七都道府県にわたり、一年間、十二ヶ月間を通して続いた。この間の走行距離はトータル、二万キロ余。二本の足で稼いだ距離は、遙か北極点から南極点に至る長さに相当する。

毎日が刺激の連続で生きる喜びが溢れる充実した日々だった。それは四十年余の会社員生活では決して得られることのなかつた、充実感に満ち満ちた一年だった。

凍るような吹雪の中、寒さに震えながらペダルを踏んだ。焼けるような猛暑の中、滝のように汗を流しながら走った。交差点で信号待ちをしていると、通りかかった同年配のオジンに握手を求められ、「ガンバレ」と激励された。暑さに耐えかねて、と

ある農家の軒下で日差しを避けていると、いきなり戸が開いて、お婆さんが冷たい麦茶をご馳走してくれた。日本列島の各地で住まいする人々から受けた親切は、数知れない。

これに味を占め、古希（七十歳）を迎えた十年後、今度は五人の可愛い孫たちにクリーンな地球を残すため、「自転車による地球温暖化防止」を呼び掛けながら、二度目の自転車による日本一周の旅に出た。

自転車に「地球に優しい自転車を活用しよう!」「自転車に優しい道路環境を実現しよう!」と、呼びかけた大きな旗を、旗竿に括りつけて走り、路上で呼びかけるとともに、全国、四十七都道府県のすべての庁舎、主要駅、観光地で直接呼びかけPRした。

また、各地で四十を超える新聞社、テレビ・ラジオ局から取材してもらい、新聞、テレビ、ラジオ、インターネットなどのマスメディアを通じ、日本全国の不特定多数の人々にもPRを行った。

そして、二度目の日本一周を果たしてから九年、今、一年後に節目の十年目を控え、傘寿（八十歳）を期して、おそらく前例が

無いであろう、三度目の自転車による日本一周を計画している。

今度も日本列島の各地で、自転車の活用による、クリーンな地球環境と健康社会の実現を呼び掛けながら走ることはもちろん、超高齢化社会を迎えた我が国にあつて、「元気で達者」な老人の、シンボルの一人として走り遂げたい。

そして、実現した暁には世界記録として、ギネスブックに登録を申請する予定だ。少年時代に抱いた夢は、幾つになっても尽きることはない。

## 立ち往生と感動の滑り

向本折町 北野 清三

ことしは、二月に北陸を襲った大雪で、交通機関が一時麻痺状態になった。

JR北陸線は三日連続で終日運休となった。国道8号は、トラックなど約千五百台もの車輛が立ち往生や激しい渋滞で、三日間も不通状態となり、物流がストップし、経済的にも大きな損失をこうむった。

コンビニやスーパーには商品が届かず、空っぽの商品棚が並び、市民生活にも大きな影響をもたらした。

最も困ったのは、身近な生活道路の除雪が置き去りにされ、歩行にも困難を極める状態であったことである。

わが家の状況を見ると、庭には二メートル近くも雪が積もり、庭木の下枝が雪の中にすっぽり埋まってしまい、雪解けと共に折れてしまっていた。

大屋根の雪までは下ろさなかったが、玄関から道路までの間は一メートルを越すほど積もった。日に何回も、家の者が歩くだけの除雪に追われた。

とも角も己が身幅の雪を掻くしかし、それだけの幅のみでは、何か後ろめたい感じで気がひけるので、もう少し幅を広げて雪掻きをする。

雪掻きて男の器量はかられるまあ、いろいろと他人の目を気にしながら一週間ばかり家に籠っていた。

その間、外の雪を見ながら、三八豪雪のことを思い返していた。

あの時は、屋根雪下ろしを何回もした。毎日降り続くので、だんだん下ろす場所がなくなり、下ろすというよりも、上にあげ